rev.20190214-1

JAILA　第 8 回全国大会

学会プログラム

兵庫県立大学
姫路環境人間キャンパス

平成 31 年 3 月 16 日（土）

JAILA
The Japan Association of International Liberal Arts
日本国際教養学会

大会概要

【日時】　平成 31 年 3 月 16 日（土）　10:00～　※ 受付開始（F 棟 2 階）8:30～

【会場】　兵庫県立大学姫路環境人間キャンパス
〒670-0092　姫路市新在家本町 1 丁目 1-12
※ 末尾に、キャンパス構内配置図を掲載してあります。

兵庫県立大学 Web サイトより：
http://www.u-hyogo.ac.jp/campuslife/access/campus04.html

【交通】　JR・山陽電鉄姫路駅下車　神姫バス乗車「県立大学環境人間学部」下車
詳細やその他の経路に関しては、HP（以下兵庫県立大学 Web サイト）をご参考ください。
① アクセスマップ（http://www.u-hyogo.ac.jp/campuslife/access/campus04.html）
② キャンパスマップ（http://www.u-hyogo.ac.jp/campuslife/access/pdf/campusmap_04.pdf）
※ 駐車スペースは限られていますので、できるだけ公共交通機関をご利用ください

【参加費】　当日会員 1,000 円、学生（フルタイム）無料、（兵庫県立大学教職員無料）

【昼食】　**当日は学内の食堂・購買は営業しておりません。昼食には大学近隣のコンビニ等をご利用ください。**

【懇親会】　**時間**：18:30～20:30
場所：サルヴァトーレ・クオモ姫路（http://www.salvatore.jp/restaurant/himeji/access.html）
会費：5,000 円（学生 3,000 円）
アクセス：大会会場よりバスをご利用ください。姫路駅で降車いただくとすぐです。

【問い合わせ先（JAILA 事務局）】

〒700-8530　岡山市北区津島中２－１－１
岡山大学全学教育・学生支援機構
基幹教育センター外国語教育部門
那須雅子　研究室
電子メールアドレス：　office@jaila.org
大会当日の緊急連絡先：090-3179-6813（寺西）

JAILA — 第８回全国大会　プログラム —

日本国際教養学会：　平成 31 年 3 月 16 日（土）兵庫県立大学姫路環境人間キャンパス

8:30-	受付（F棟２階）		
10:00-10:10	開会式（F302教室）		
教室	F203教室	F301教室	F302教室
Session 1 司会	劉 雯（ひょうご震災記念21世紀研究機構）	齋藤　安以子（摂南大学）	深谷　素子（鶴見大学）
10:10-10:40	**「日本と中国の大学における第二外国語の習得の現状と課題—アンケート調査に基づいて—」** 王　瑾（兵庫県立大学）	**“Geminates in French”** Hideo Kobayashi（兵庫県立大学）	**「モンゴルにおけるCLIL授業の試み —中学生への日本語と理科実験による授業実践の検証—」** 坂本南美・高原周一（岡山理科大学）・GANBAATAR Tumurbaatar（モンゴル国立教育大学）
10:40-11:10	**「観光サインの多言語化における言語観影響」** 松浦芙佐子・黎暁妮・徐沇廷・全円子・湯文(岡山商科大学)	**“Visiting Yoko Tawada’s Hamburg: An Attempt at “Border-Crossing” Literary Research ”** Thomas Brook（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程）	**「小学校における英語音声指導に表れる教師の信念に関する事例研究—中学校英語科教員の省察的語りに着目して—」** 和田あずさ（兵庫教育大学）
11:10-11:40	**「中国人大学院生の留学動機に沿った言語習得支援の方策—日本在住人文社会科学系専攻者の場合—」** 徳永光展（福岡工業大学）	**“Hearing the Sound of Trees: An Analysis of Sound Performances in the Poetry of Robert Frost”** Anna Maria C. Hata（東京大学大学院博士後期課程）	**「高校英語科における四技能を動機づける文学的教材としての洋楽の導入及び、その活用方法と効果の質的分析と考察」** 漆畑祐佳（静岡県立静岡城北高校）
11:40-12:30	ポスター発表（ F202（大会議室））		
12:30-13:30	昼食		
教室	F203教室	F301教室	F302教室
Session 2 司会	乾　美紀（兵庫県立大学）	草薙　優加（鶴見大学）	奥田　恭士（兵庫県立大学）
13:30-14:00	**“The Impact of Reading Experience in Japanese on English Proficiency”** Azumi Yoshida（兵庫県立大学環境人間学研究科博士前期課程）	**「保育の記録発信を支える画像蓄積システム—保育者の職業意識と自己肯定感を高めるために」** 志田晃一郎（東京都市大学）	**「地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ルーブリックに関する実践的研究（３）—教育プログラムの効果検証—」** 佐藤大介・鈴木瞬（くらしき作陽大学）
14:00-14:30	**“Teaching English Pronunciation to Japanese”** Robin Eve（兵庫県立大学）	**「コースの「一部」で使う文学教材—*Pygmalion*を用いた英語授業の実践から—」** 久世恭子（東洋大学）	**「越境する詩の言葉：エズラ・パウンドによるフランス象徴詩の英語訳」** 鈴木哲平（江戸川大学）
14:30-15:00		**「コーパスから読む児童文学と教材化の課題」** 奥　聡一郎（関東学院大学）	**「『第31代米大統領H・フーバーの「裏切られた自由」が教えるもの』概要」** 松元直歳（近現代史研究者「月曜評論」社友）
15:00-15:10	休憩		
15:10-17:10 (F302教室)	**シンポジウム「参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学びの可能性」** 講師：坂本　南美（岡山理科大学） 岩本　華苗（九州大学学生） 前田　幸也（兵庫県立大学附属高等学校） 今井　裕之（関西大学）		
17:10-17:15	開催校挨拶　太田　勲（兵庫県立大学学長）		
17:15-17:50	閉会式・総会・会長報告（F302教室）		
18:30-20:30	懇親会（サルヴァトーレ・クオモ姫路 ） http://www.salvatore.jp/restaurant/himeji/access.html 会費：5000円（学生　3000円）		

研究発表及び講演概要　目次

午前の部 1

Session 1　10:10-11:40 1

［F203 教室］　10:10-11:40 1

日本と中国の大学における第二外国語の習得の現状と課題—アンケート調査に基づいて— 1

観光サインの多言語化における言語観影響 1

中国人大学院生の留学動機に沿った言語習得支援の方策—日本在住人文社会科学系専攻者の場合— 1

［ F301 教室］　10:10-11:40 2

Geminates in French 2

Visiting Yoko Tawada's Hamburg: An Attempt at "Border-Crossing" Literary Research 2

Hearing the Sound of Trees: An Analysis of Sound Performances in the Poetry of Robert Frost 2

［ F302 教室］　10:10-11:40 3

モンゴルにおける CLIL 授業の試み ―中学生への日本語と理科実験による授業実践の検証― 3

小学校における英語音声指導に表れる教師の信念に関する事例研究—中学校英語科教員の省察的語りに着目して— 3

高校英語科における四技能を動機づける文学的教材としての洋楽の導入及び、その活用方法と効果の質的分析と考察 3

午後の部 4

Session 2　13:30-15:00 4

［402 教室］　13:30-15:00 4

The Impact of Reading Experience in Japanese on English Proficiency 4

Teaching English Pronunciation to Japanese 4

［ F301 教室］　13:30-15:00 5

保育の記録発信を支える画像蓄積システム—保育者の職業意識と自己肯定感を高めるために 5

コースの「一部」で使う文学教材—*Pygmalion* を用いた英語授業の実践から— 5

コーパスから読む児童文学と教材化の課題 5

［ F302 教室］　13:30-15:00 6

地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ルーブリックに関する実践的研究（３）—教育プログラムの効果検証— 6

越境する詩の言葉：エズラ・パウンドによるフランス象徴詩の英語訳 6

『第 31 代米大統領 H・フーバーの「裏切られた自由」が教えるもの』概要 6

シンポジウム ［F302 教室］ 15:10-17:10 7

参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学びの可能性 7

ポスターセッション ［F202(大会議室)］ 11:40-12:30 8

1. 姫路におけるニューカマーの教育支援をデザインする～保護者の支援及びキャリア教育の視点から～ 8
2. 私たち学生にできる国際協力～ラオス・カンボジア・フィリピンに着目して～ 8
3. 日本と中国の大学における第二外国語の習得の現状と課題――アンケート調査に基づいて―― 8
4. Correspondence Analysis and Its Applications in Sociological Studies of English as a Foreign Language 9
5. 翻訳の文体：（脱）女性化された女性のことば 9
6. ファッション誌から見える日米文化－比較文体論的考察－ 9
7. 「暗号化」コミュニケーションとその翻訳－『ジオストーム』の分析－ 10
8. 学部学生へのグローバル教育科目の実践と学生の理解度に関する考察 10
9. 理系学生への科学英語教育とグローバル科学教育の実践と考察 10
10. イタリアにおける農村再生への取り組み－スローフード運動と認証システム－ 10
11. Teaching Academic Skills in Speaking Courses of English at Japanese Universities and Colleges 11
12. 「教養」と「実用」をつなぐ文体論：ナラティブ・メディスンの実践方法に関する考察 11
13. 翻訳論の医学英語教育への応用を試みた研究 11
14. *Pride and Prejudice* における Bennet 家の娘たちへの呼称と言及 12
15. 気象モデルを用いたため池が周辺の気象に与える影響評価 12
16. オーラルヒストリー研究：アジア地域で活躍するグローバル人材に必要とされる「能力」について 12

研究発表及び講演概要

午前の部

Session 1　10:10-11:40

［F203 教室］　10:10-11:40

日本と中国の大学における第二外国語の習得の現状と課題―アンケート調査に基づいて-

王　瑾　兵庫県立大学　講師（非）

外国語教育としての中国語の現状について、中国語を第二外国語として受講している日本の大学生に対しアンケート調査を行った。また同様なアンケート調査を、日本語を第二外国語として受講している中国の大学生に対して行った。その結果を比較分析し、それぞれの国の大学生の特徴、また言語の特色等、日本と中国の大学における第二外国語の習得の現状と今後の外国語教育の課題について発表する。

観光サインの多言語化における言語観影響

松浦　芙佐子　岡山商科大学　准教授
黎　暁妮　岡山商科大学　准教授
徐　沇廷　岡山商科大学　講師
全　円子　岡山商科大学　准教授
湯　文　岡山商科大学　助教

訪日外国人観光客の増加を受け、観光サインの多言語化が進捗する一方で、その問題点も顕在化しつつある。本発表では、日本各地の観光地に見られる多言語表記から誤訳や誤表記などを収集・分析した結果を踏まえ、エラー生起の一因として日本語と外国語（英語、中国語、韓国語）との言語観影響（cross-linguistic influence）に着目する。特に、言語間の相違がエラーをどのように生起させたのか、音韻、形態並びに統語的観点から詳述する。

中国人大学院生の留学動機に沿った言語習得支援の方策―日本在住人文社会科学系専攻者の場合―

徳永　光展　福岡工業大学　教授

日本留学を希望する学生の動機に日本語習得とその能力を武器とした就職が目標として挙げられることは言うまでもない。例えば、日本語能力試験の１級（N1）合格は外国人学生が日本の大学や大学院に入学する際に要求されることが多く、留学生にとっての目標となることも多い。本発表は、中国から大学院修士課程に留学してくる大学院生の入学目的をヒヤリングした結果報告と彼らを大学院生活に適応させる言語習得支援の方策を提言しようとするものである。

［ F301 教室］ 10:10-11:40

Geminates in French

Hideo Kobayashi 兵庫県立大学 講師（非）

There is general acceptance that orthographic double consonants in French, but not in all cases, may optionally be pronounced as geminates (Valdman 1972; Tranel 1987). Little research has been conducted to investigate the distribution of geminates in the source language (see Kirchner 2001). The objective of the present study is to provide the descriptive data of French geminates, as culled and collated from *Crown Dictionnaire Francais-Japonais* (1989; 1995; 2006), and accordingly obtain the testing grounds for formalization of double consonants in French. Observations are presented based on the analysis of 488 French geminates.

Visiting Yoko Tawada's Hamburg: An Attempt at "Border-Crossing" Literary Research

Thomas Brook 神戸大学大学院博士後期課程

In this presentation, I will discuss the challenges and opportunities presented by contemporary Japan's "border-crossing literature" (ekkyō bungaku), with a particular focus on Yoko Tawada, who writes in both German and Japanese. "Border-crossing authors", by definition, have backgrounds and careers that span multiple nations, cultures, and languages. However, it is difficult to write about them and their works without having to "translate" into an existing, monolingual and nationally aligned academic discipline.

I will introduce and analyse the relevant practical and theoretical issues in the context of a recent 4-month period of fieldwork conducted in Hamburg, where Tawada lived, studied and worked from 1982 to 2006.

Hearing the Sound of Trees: An Analysis of Sound Performances in the Poetry of Robert Frost

Anna Maria C. Hata 東京大学大学院博士後期課程

The purpose of this study is to discover a meaningful connection between aural impressions and semantic expressions in a written text through analyzing a poem, "The Sound of the Trees" by Robert Frost. This analysis explores the pervasive presence of Frost's exquisite poetic sounds flowing out from the diction of his poetry. By examining the use of rhythm, rhyme and phonemic components in his verse, this study attempts to show how sound performances give peculiar aural impressions to readers and to demonstrate how these impressions are closely linked to the semantic expressions that the poem conveys.

［ F302 教室］　10:10-11:40

モンゴルにおける CLIL 授業の試み ―中学生への日本語と理科実験による授業実践の検証―

坂本　南美　岡山理科大学　准教授
高原　周一　岡山理科大学　教授
GANBAATAR Tumurbaatar　モンゴル国立教育大学

モンゴルの初等・中等教育は、近年の教育改革の変遷を経て、2014 年に国際スタンダードの 12 年制に移行した。このことによって、海外留学を視野に外国語学習に取り組む中高生も増えている。本発表では、ウランバートルで日本語教育に力を入れている小中高一貫校の中学生に行った日本語と理科実験による CLIL (Content and Language Integrated Learning) の授業を通して、CLIL 授業がモンゴルの学習者にどのような影響をもたらしたか、また指導過程の手法等の可能性について検証する。

小学校における英語音声指導に表れる教師の信念に関する事例研究―中学校英語科教員の省察的語りに着目して―

和田　あずさ　兵庫教育大学　助教

小学校外国語教育においては，音声中心の指導を基本として，経験も英語運用能力も様々な教員が指導に携わっている。授業実践とその背景にある授業者の心的過程を提示し解釈することで，他の授業者が類似の経験や感情をもとに多様な実践知を得ることができる。本発表では，小学校外国語活動の指導に携わった中学校英語科教員を事例とし，参与観察と継続的な省察によって導出された英語音声指導とその背景にある教師の信念の変容過程について報告する。

高校英語科における四技能を動機づける文学的教材としての洋楽の導入及び、その活用方法と効果の質的分析と考察

漆畑　祐佳　静岡県立静岡城北高校、岡山大学大学院博士後期課程

目まぐるしく変化する IT 化やグローバル化される社会の中で、高校生にとって今や洋楽は身近な英語の教材となりうる。この度、平成 30 年度において、高校英語の授業にオーセンティックな教材として導入した洋楽について、その効果を、教師の振り返りや生徒のアンケート調査を通して、特に英語の四技能の点からの効果について、質的な分析を試みた。

午後の部

Session 2　13:30-15:00

［402 教室］　13:30-15:00

The Impact of Reading Experience in Japanese on English Proficiency

吉田 安曇　兵庫県立大学大学院博士前期課程

Rapid globalization has required people to become more proficient in English. It seems reasonable, however, to say that learners should understand their mother tongue well and be sophisticated speakers before learning English. It is almost universally acknowledged that reading in one's mother tongue assists the acquisition of high level language skills. It also seems that reading inspires the imagination and sense for accuracy which will lead to solid language ability. If you possess a high level of competence in Japanese, then you will probably show the same skills in English as well. This study aims to examine the impact of reading experience in Japanese on English proficiency through qualitative analysis of interviews with EFL learners.

Teaching English Pronunciation to Japanese

Robin Eve　兵庫県立大学　特任教授

Drawing on his experiences as an E.F.L. teacher and also as a music teacher, Robin Eve, with colleagues, has written a practical and progressive course in teaching pronunciation for university students and adults. The course takes a more practical approach to task, compared to other similar publications. The presentation puts forward the linguistic and pedagogical rationale behind the course. The new book was published last year. It has been taught and tested in the classroom. The results of a review of students opinions about the course will be presented.

［ F301 教室］　13:30-15:00

保育の記録発信を支える画像蓄積システム―保育者の職業意識と自己肯定感を高めるために

志田　晃一郎　東京都市大学　講師

ラーニングストーリーとは，保育園で子どもの学びをアセスメントするために子どもの写真とその物語を用いる方法で，マーガレット・カーらが開発した．本研究では，ある保育園にラーニングストーリーを導入する目的で，大学教員２名が IT 機材の援助と使い方の説明を行った．初めは保育士も慣れず機材のトラブルも散発したが，途中から導入した，写真を掲載できるクローズドな SNS システムを自発的に父母に公開し，さらには次のシステムを選定するに至った．その過程を大学教員の視点から論じる．

コースの「一部」で使う文学教材―*Pygmalion* を用いた英語授業の実践から―

久世　恭子　東洋大学　講師

文学教材を、英語コースの全体ではなく、一部で使う場合、その理由は様々であろうが、一部分で用いるからこその意義もあると推測される。本発表では、社会言語学に関する事象を解説するテクストを主教材とする１学期間の大学英語コースで、３回だけ戯曲 *Pygmalion* と映画 Pygmalion, My Fair Lady を取り入れる授業の実践を紹介し、創造的な活動や質問紙調査に見られる受講生の反応を分析する。

コーパスから読む児童文学と教材化の課題

奥　聡一郎　関東学院大学　教授

本発表では、英米児童文学の中でもファンタジー作品を素材に、その言語表現にみられる文体的な特徴をコーパスから分析し、品詞レベルを中心に詳述する。児童文学作品は一般的には読みやすいとされるが、日本の英語教育の教材とするためには再話などの工夫が必要であると思われる。コーパスの分析結果から教材化に対する具体的な方略を提示し、児童文学の教材の可能性について論じる。

［ F302 教室］　13:30-15:00

地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ルーブリックに関する実践的研究（3）―教育プログラムの効果検証―

佐藤　大介　くらしき作陽大学　講師
鈴木　瞬　くらしき作陽大学　講師

本発表は、JAILA 第 7 回全国大会「地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ルーブリックに関する実践的研究（1）および（2）」で発表した学生の自己評価分析を今年度の結果も踏まえ報告する。本学では COC 事業において「くらしき学コース活動」を行い、初年次に学生は様々なグループに分かれ、地域貢献活動に取り組んでいる。今回は学生の自己評価を 2 年分分析することで、この教育プログラムについて効果検証し、その改善を図る。

越境する詩の言葉：エズラ・パウンドによるフランス象徴詩の英語訳

鈴木　哲平　江戸川大学　准教授

アメリカのモダニズム詩人エズラ・パウンド（1885-1972）はギリシャ語、ラテン語、イタリア語、フランス語から中国語、日本語、ヒンドゥー語まで、多種で多量の翻訳を残した。本発表では、その中で、フランス象徴詩の翻訳と受容を考えてみたい。パウンドにおいては、時期を追うにつれて詩人に対する彼の評価も変化する。この変化を追いつつ、ランボーやラフォルグが、パウンドや英語詩に及ぼした影響を検討するつもりである。

『第 31 代米大統領 H・フーバーの「裏切られた自由」が教えるもの』概要

松元　直歳　近現代史研究者「月曜評論」社友

本書は、第二次大戦時の米大統領フランクリン・D・ルーズヴェルトの直前の大統領、ハーバート・フーバーによって著された渾身の「大事業」で、「米国の第二次世界大戦への参戦はルーズベルト政権によって考出された」と、主張するものである。真珠湾攻撃が果たした役割も明らかにされる。本発表では、まず本書を中心に解説をする。また、ルーズヴェルト・チャーチル・スターリン・蒋介石・中国共産党の戦争企図と戦略について解説する。

シンポジウム［F302 教室］ 15:10-17:10

参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学びの可能性

坂本　南美　岡山理科大学　准教授
岩本　華苗　九州大学　学生
前田　幸也　兵庫県立大学附属高等学校　教諭
今井　裕之　関西大学　教授

現在、日本の英語教育は、小学校への英語科の導入、中学校における授業デザインの転換、高等学校での教科・科目の再編、大学入試改革をはじめ、大きな変革の時期を迎えている。急速な変化の中で、個々の教室では、何を残し、何を高め、何を新たに始めていけばよいか。本シンポジウムでは、登壇者がそれぞれ、英語学習者、中学校教員、高等学校教員、大学教員としての経験に根差した視点から捉えた英語教育について語る。そこから見えてきた成果や課題をオーディエンスと共有することで、英語教育にかかわる人々にとって、組織的・協働的に英語学習者を育てる視点や力量を高める契機としたい。

ポスターセッション ［F202(大会議室)］ 11:40-12:30

1. 姫路におけるニューカマーの教育支援をデザインする～保護者の支援及びキャリア教育の視点から～

乾　美紀　兵庫県立大学　准教授
西川　真由　兵庫県立大学　学生
堀越　亮公　兵庫県立大学　学生
後谷　花凜　兵庫県立大学　学生

姫路市はかつて難民の受け入れをしていた歴史から、現在でも多くのニューカマーが定住している。彼らは言語面や経済面にハンディキャップを抱えており、その中でも子ども達の進学や就職が大きな問題になっている。そこで本研究では、ニューカマーの教育支援を保護者の支援とキャリア教育という２つの視点から検討し、より良い視点の在り方をデザインする。

2. 私たち学生にできる国際協力～ラオス・カンボジア・フィリピンに着目して～

乾　美紀　兵庫県立大学　准教授
藤岡　真士　兵庫県立大学　学生
原田　雅也　兵庫県立大学　学生
山本　恵里　兵庫県立大学　学生
久米　真依　兵庫県立大学　学生

学生国際協力団体には、NPO などと連携して支援を行う団体と、ほとんどの活動を学生のみで行なっているものがある。この２種類の団体の違いを、私たちが実際に所属する団体（CHISE、HERO、CFF）を例に明らかにし、それぞれの強みを見出していく。

3. 日本と中国の大学における第二外国語の習得の現状と課題――アンケート調査に基づいて――

王　瑾　兵庫県立大学　講師（非）

外国語教育としての中国語の現状について、中国語を第二外国語として受講している日本の大学生に対しアンケート調査を行った。また同様なアンケート調査を、日本語を第二外国語として受講している中国の大学生に対して行った。その結果を比較分析し、それぞれの国の大学生の特徴、また言語の特色等、日本と中国の大学における第二外国語の習得の現状と今後の外国語教育の課題について発表する。

4. Correspondence Analysis and Its Applications in Sociological Studies of English as a Foreign Language

内山　八郎　同志社大学 全学共通教養教育センター　准教授

Correspondence analysis is neither novel nor atypical as a method of analysis in social sciences in general and educational sociology in particular. Nevertheless, it is the impression of the presenter that correspondence analysis has been relatively underutilized, despite its prolific potentials and usefulness. Specifically, this tendency of underuse seems to be the case in sociological studies on English language education in Japan. In response to such situations, this presentation not only offers a brief history of correspondence analysis but also demonstrates its practicality by introducing some samples from the presenter's field of work—that is, English language education at a university in Japan.

5. 翻訳の文体：（脱）女性化された女性のことば

境 美樹　兵庫県立大学　学生
塚本 真由　兵庫県立大学　学生
難波 衣里　兵庫県立大学　学生
寺西 雅之　兵庫県立大学　教授

本発表では、英語原文から日本語に翻訳された作品のうち、特に女性の言葉の訳し方に注目し、文体論の観点から分析・考察を行う。Furukawa (2018)によると、英語文学からの日本語訳では、女性キャラクターの言葉は現代的な「脱女性化」された言葉が避けられ、「女性らしさ」が強調された言葉が好まれる傾向にあるという。そこで、本研究では、小説、絵本、映画など様々なジャンルに登場する女性の言葉を取り上げ、その「（脱）女性性」について分析を行う。さらに分析に基づいて、ジャンルごとに期待される「女性らしさ」や社会が求める女性像についても考察を加える。

参考文献

In J. Boase-Beier, L. Fisher & H. Furukawa (eds.) (2018) *The Palgrave Handbook of Literary Translation*. New York: Palgrave Macmillan. 107-123.

6. ファッション誌から見える日米文化－比較文体論的考察－

皆川 真穂　兵庫県立大学　学生

ファッション誌は、流行を作り上げるだけでなく、固定観念にとらわれないファッションの「多様化」を促進する役割がある。そのようなファッション誌の深い理解と分析には、テクストに加えて写真等のイメージをも対象にしたマルティモダル文体論(multimodal stylistics)が有効である。本研究では、US Vogue, mina という日米の代表的ファッション誌を取り上げ､そのテクストおよびイメージの分析より、日米の文化の違いの一端を明らかにしたい。さらにファッション誌が「多様化」に与える影響についても考察を加える。

7.　「暗号化」コミュニケーションとその翻訳－『ジオストーム』の分析－

東 瑛未　兵庫県立大学　学生

文体論の分野において、翻訳への注目度は年々高まっており（Boase-Beier et al. 2018)、実際、原文の意図を「忠実に」翻訳しようとする際には、文体論的な知識と技術は不可欠である。特に映画の字幕など「規定」や「制約」がある中での翻訳には、文体論を含む様々な視点から訳文を考える必要がある。本発表では 2017 年に公開された SF 映画『ジオストーム』のワンシーンに見られる「暗号化コミュニケーション」を取り上げ、その原文および翻訳の特徴を翻訳文体論の観点から明らかにする。分析結果をもとに、暗号化されていることを鑑賞者に示すための字幕の工夫とその効果を考察する。

8.　学部学生へのグローバル教育科目の実践と学生の理解度に関する考察

白井　智子　神戸大学国際文化学研究推進センター　研究員
大内　幹雄　兵庫県立大学　教授

「グローバル」をキーワードにした学部学生向けの教養科目について、グローバルな視点で日本の文化を見つめ直し、世界に発信するための課題を学生に与えた。その実践内容と、受講学生全員の課題発表から、大学におけるグローバル教養科目の現状と将来の課題を考察した。

9.　理系学生への科学英語教育とグローバル科学教育の実践と考察

大内　幹雄　兵庫県立大学　教授
市川　一夫　兵庫県立大学　名誉教授

大学学部 1 回生の英語科目を習得した工学部、理学部の 2 回生が学習する科学英語の教育について、「グローバル」をキーワードにした教材内容、受講学生の関心・理解度について考察した。さらに理系の 1 回生を主対象にした教養教育科目で、英語で紹介された資料をもとにして、グローバルに展開する最新科学についての講義の内容と将来の課題について考察した。

10. イタリアにおける農村再生への取り組み－スローフード運動と認証システム－

佐藤　宏子　和洋女子大学　教授

イタリアにおける第二次大戦後の農業・農村の衰退は、1960 年代前半までは日本に酷似していた。しかし、イタリアは 1960 年代後半から農業・農村地域の再生に向けて、独自のメカニズムを生み出した。本研究では、日本の中山間地域の農業再生への示唆を得るために、現地視察をもとにイタリア農村を再生に導いたスローフードというコンセプトと認証システム、そうしたダイナミズムの根底にある社会的要因について検討・考察する。

11. Teaching Academic Skills in Speaking Courses of English at Japanese Universities and Colleges

川上　聰　兵庫県立大学　講師（非）

In the area of English education at Japanese universities and colleges, improving the learners' academic skills has come to be a popular topic of discussion. In the present study, the author focuses on the aural/oral skills, and extends the discussion on the effective adoptions of the speaking components of the academic skills to teaching English.

In the presentation, the author first analyzes the environmental differences between the tertiary English education in Japan and the typical English for Academic Purposes programs. In addition, he attempts to extract the major components of the academic skills applicable to speaking. Then, the discussion is extended to suggesting some effective adoptions of teaching academic skills to the speaking courses of English in Japan.

12. 「教養」と「実用」をつなぐ文体論：ナラティブ・メディスンの実践方法に関する考察

寺西 雅之　兵庫県立大学　教授

ナラティブ・メディスンは文学を読むという「教養」と、医療という「実用」が融合する学際分野であるが、本発表ではその中で文体論が果たし得る役割について考える。Charon et al (2017)によると、患者のナラティブに細心の注意（attention）を払うには「精読」が不可欠であるが、同様の効果を持つ「文体論」については言及はなされていない。本発表では、このように文体論が「誤解」されてきた理由について、両者の目的・手法に触れながら考察する。最後に「医療ノンフィクション」の代表作 *Brain on Fire* (2012)（邦題『脳に棲む魔物』）を取り上げ、その文体分析に基づいて、病、語り手、そして患者の気持ち・意識の実態の解明に文体論がどのように貢献できるか考えてみたい。

参考文献

Charon,R., S. Dasgupta, S., Hermann, N., Irvine, C., Marcus, E. R., E. R. Colon, Spencer, D. & Spiegel、M. (eds.) (2017). *The Principles and Practice of Narrative Medicine*. Oxford: Oxford University Press.

13. 翻訳論の医学英語教育への応用を試みた研究

西村　真澄　岡山大学　講師（非）、兵庫県立大学大学院博士後期課程

本発表では、日本の医学部生のニーズを反映し、翻訳論の医学英語教育学習法への応用を試みた。特に会話の向上を目指して実施した実験（英語模擬講義）を行い、その結果と発表者が作成した翻訳論に基づく演習を取り入れた教材を紹介し、その教育的効果と今後の改善点について考察を加える。本研究を通して医学英語の習得のための情報提供のできる医学英語オンラインプログラムの作成を志し、医学英語教育に貢献できることを目指す。

14. *Pride and Prejudice* における Bennet 家の娘たちへの呼称と言及

笠本　晃代　岡山大学大学院博士後期課程

Jane Austen （1775～1817）の *Pride and Prejudice* では、Bennet 家に 5 人の娘がいる。結婚前と結婚後では、呼び方・表現の仕方が異なる。本発表では、長女である Jane と次女の Elizabeth、そして五女 Lydia を中心に、ナレーターや母親などの視点から、彼女たちがどのような名称・呼び方で表現されているかを分析する。さらには、その呼称と社会的・歴史的背景との関連についても考察を加える。

15. 気象モデルを用いたため池が周辺の気象に与える影響評価

春木 優杏　兵庫県立大学大学院博士前期課程

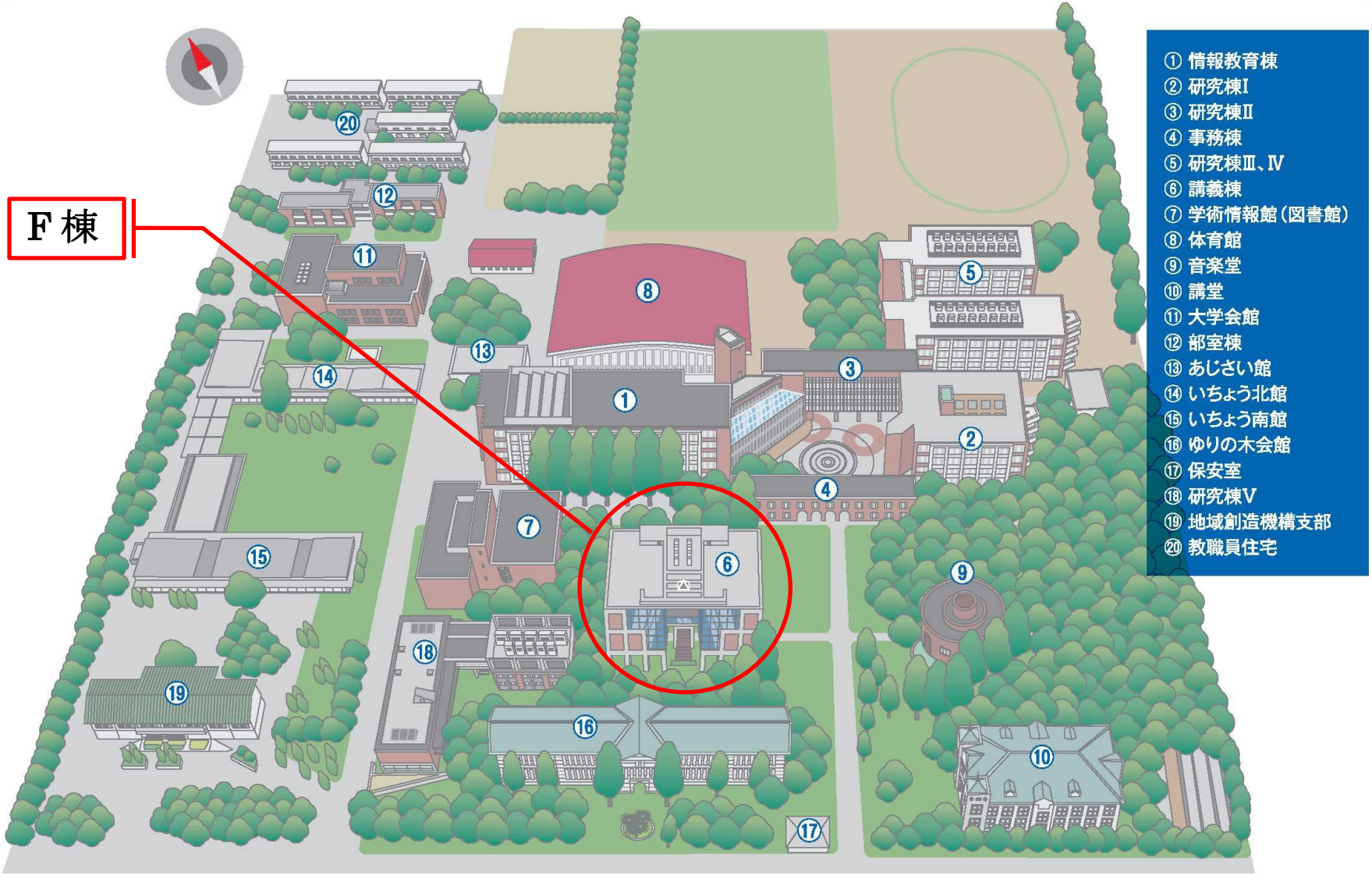
兵庫県は全国でも有数のため池が存在している地域で、その数は約 38,000 面と、2019 年現在日本一である。また東播磨地域の印南野台地では、標高が高く、周辺河川からの農業用水の灌漑が困難であることから、特にため池が集中している。近年では、ため池の周辺における暑熱環境下での高温抑制作用が注目を集めている。本研究では、領域気象モデルを用いて、印南野台地のため池の有する高温抑制作用の評価を行った。

16. オーラルヒストリー研究：アジア地域で活躍するグローバル人材に必要とされる「能力」について

那須 雅子　岡山大学　全学教育・学生支援機構基幹教育センター　准教授

グローバル人材育成推進会議中間まとめ（2011）は、グローバル人材に求めるべき語学力水準について、「業務上の文書・会話レベル」といった中級レベルの裾野の拡大は着実に進捗しているものの、「二者間および多数者間折衝・交渉レベル」といった上級レベルの語学力を備えた人材の確保が極めて重要であると指摘した。折衝や交渉を実践するような高度な外国語を駆使できる人材の育成とは、果たして従来の外国語教育の枠組みの中で実践できるのであろうか。本研究では、アジア地域において活躍しているグローバル人材に行った複数回にわたるインタビューに基づき、現代社会に必要とされる「能力」や「資質」の実態と、その習得方法について考察する。

タイムテーブルへ

兵庫県立大学環境人間キャンパス（兵庫県立大学 HP より画像化して転載：http://www.u-hyogo.ac.jp/campuslife/access/pdf/campusmap_04.pdf）

姫路環境人間キャンパス